近現代史特講⑤

〇戦後、共産圏の情勢

ソ連の独裁→東欧をも支配

⇔ユーゴスラヴィアのティトーが反発←スターリンはユーゴをコミンフォルムから除名（1948）

→東西陣営からも距離＝非同盟外交

→第一回非同盟諸国首脳会議（1961）←ベオグラードで

⇒スターリンの死（1953）→反ソ暴動が東欧各地で発生（東ベルリン暴動など）

⇒フルシチョフによる「スターリン批判」（1956）

→さらに反ソ暴動が広がる（ポーランドのポズナニ→ゴムルカが政権に）

↓ （ハンガリー→ナジ=イムレによるソ連からの脱却宣言）

ミコヤンの「平和共存路線」に対する反発も

→中国が反発＝中ソ論争（1960～）（←アルバニアが中国を支持）

（←チャウシェスク政権のルーマニアも中国と友好）

⇒チェコスロヴァキアでも自由化路線＝「プラハの春」（1968）←ドプチェクによる

⇔ソ連（ブレジネフ）が軍事介入（ワルシャワ条約機構軍を動員）

→アルバニアがワルシャワ条約機構を脱退

→中国も反発⇒中ソ国境紛争（1969）

〇中華人民共和国の情勢

・1949 年建国→土地改革法（1950）

↓ →中ソ友好同盟相互援助条約（1950）→第一次五カ年計画（1953～）

・朝鮮戦争（1950～53）で、義勇軍を派遣

・チベットに人民解放軍を派遣し、併合（1950）

⇩ →インドと国境を接し、「アジアの脱冷戦化」をともに目指す

⇒周恩来・ネルー会談（1954）→平和五原則

⇒第一回アジア・アフリカ会議（1955）←バンドンで

チベット反乱（1959）→ダライ・ラマ14世がインドへ亡命

→インドと中国の対立→中印国境紛争へ

・第二次五カ年計画（1958～）＝大躍進

↓ →農業の集団化（人民公社の設立）

失敗に終わり、主導者の毛沢東が政治の前面から後退

↓

国家主席：劉少奇　総書記：鄧小平　となる

→集団化を縮小→余剰生産物の自由販売を認めた

毛沢東が反発＝文化大革命（1966～）→紅衛兵を動員し、反対派を逮捕、迫害

→1976年に死去→江青ら四人組が後継になろうとするも逮捕＝文革の終了

⇒華国鋒が主席となる

→鄧小平が復権（1981）（→胡耀邦を総書記、趙紫陽を首相に）

→「改革・開放」政策…欧米の技術を学び、資本の導入を受け入れる

↓＝経済特区の設定

様々な情報が中国へ流入し、共産党独裁に対する疑問

→学生を中心に、天安門広場を占拠→人民解放軍が弾圧＝天安門事件（1989）

〇アフリカの情勢

戦後最初の独立国はリビア（←1951年に王国として独立）

↓→軍部のクーデタにより、カダフィが実権（1969～）

これ以降、地中海沿いの国が独立（チュニジア、モロッコ（ともに1956年））

・ブラック・アフリカ初の独立＝ガーナ（1957）←エンクルマ指導のもと、イギリスから独立

・ギニア（1958）←セク・トゥーレ指導のもと、フランスから独立

⇩

1960 年、17の国が一挙に独立＝「アフリカの年」

⇔経済的実権は旧宗主国がにぎる

⇔アフリカ統一機構（OAU）結成（1963）→アフリカ連合（AU）へ（2002）

・アルジェリア←1830 年以来、フランスの植民地

→民族解放戦線（FLN）（1954）がフランスに対し、アルジェリア独立戦争

→1962年、ド=ゴール大統領はアルジェリア独立を認めた

・モザンビーク、アンゴラの独立（1975）←ポルトガルから独立

・ジンバブエの独立（1980）←ローデシアの白人支配の崩壊

・南アフリカ→アパルトヘイト政策⇔アフリカ民族会議（ANC）（1912）…「非暴力主義」

→1991年に停止→94 年、ネルソン・マンデラ大統領の誕生

〇1960 年代～70年代

｛（a）米ソ間におけるデタントの進展
｛（b）多極化の進行

●ベトナム戦争

インドシナ戦争（1946～）…旧宗主国フランスと、ベトミン（ベトナム独立同盟）の争い
→ホー=チ=ミンが中心

→ディエンビエンフーの戦い（1954）で、ベトミンがフランス軍を撃破

⇒ジュネーヴ休戦条約（1954）

｛→南：ベトナム共和国（1955）←アメリカの支援　ゴ・ディン・ディエムが首班
｛→北：ベトナム民主共和国←ホー=チ=ミンが中心
→南部のジャングル地帯に南ベトナム解放戦線（1960）

→米大統領ジョンソン…トンキン湾事件（1964）をでっち上げ、北爆開始→地上軍も派遣
＝ベトナム戦争の開始（1965）

→北ベトナムは空爆などに耐え、ゲリラ戦⇔米軍は枯れ葉剤を散布

⇒テト攻勢（1968）で、多数の死者（←報道により、反戦運動が広まる）

→大統領選でニクソン（共和党）が勝利

→パリ和平会談の開始（1968）→パリ和平協定（1973）で米軍の撤退

→1975年、北ベトナムが南ベトナムを降伏させ、ベトナム社会主義共和国となる（1976）

アメリカは、戦費の増大による財政赤字・貿易赤字を抱える

→金の流出を防ぐため、金とドルの交換を停止＝ドル・ショック

●米中接近

ベトナム戦争では対立→ベトナムからの早期撤退のため、仲良くする必要（米）
→ソ連と対立し、さらに文化大革命で余裕なし（中）

⇒キッシンジャーの仲介で、ニクソン訪中（1972）

→米中国交正常化（1979）←カーター大統領のとき

⇔中国とベトナムが対立→中越戦争（1979）

●ヨーロッパのデタント

・核拡散防止条約（1968）→第一次戦略兵器制限交渉（SALT-1）（1972）

・西ドイツのブラント…東側諸国と友好を促進＝東方外交

→西ドイツ・ポーランド条約（1970）（←将来、国境をオーデル・ナイセ川に）

→1972年、東西ドイツ基本条約（→東西ドイツが国際連合に加盟）（1973）

・ヘルシンキで全欧安保協力会議（CSCE）設立（1974）

〇1979年の転換点

・イラン革命（1979）→親米の国王、パフレヴィー2世が失脚→シーア派のホメイニが政権に

・ニカラグア革命（1979）→サンディニスタ解放戦線が、親米のソモサ政権を打倒

・ソ連軍によるアフガン侵攻（1979）→親ソ派の共産党政権を樹立（イスラムを弾圧）

⇒デタントの雰囲気は消える＝ソ連脅威論

↓

レーガン大統領就任（1980）

↓ →減税するも、社会福祉予算の削減、規制緩和による自由競争の促進＝レーガノミクス

軍拡予算の増大、ソ連との軍縮交渉も破綻

→イラン・イラク戦争（1980～1988）でフセイン政権を支援

⇒アメリカ産業の停滞により、国家財政の赤字・貿易収支の赤字＝「双子の赤字」

←

軍縮の道へ…→ソ連との対談が不可欠

→農業生産の停滞、軍拡による経済破綻

→ゴルバチョフによるペレストロイカ（改革）

〇冷戦の終結

米ソ首脳会談を再開（1985）→INF（中距離核戦力）全廃条約（1987）

→第一次戦略兵器削減交渉（START-1）再開→1991 年妥結

⇒マルタ会談（1989）→ゴルバチョフとブッシュによる冷戦の終結

〇ソ連の行方

ペレストロイカの失敗→東欧諸国でも不満が爆発

↓

東欧革命（1989）→東ドイツからは、国民がハンガリーを通って西側へ

⇒1989 年、「ベルリンの壁」の撤去

→東西ドイツが統合（1990）

→ポーランド：「連帯」指導者ワレサが大統領に

→ルーマニア：チャウシェスク独裁政権の崩壊

↓

共産党保守派が反発→ゴルバチョフに対するクーデタ

⇒改革派のエリツィンをシンボルとする市民の反撃により、ソ連邦の解体（1991）

→バラバラになった15の共和国は、独立国家共同体（CIS）を形成

→ロシア国内では、少数民族の独立運動（チェチェンなど）

〇冷戦後の世界（アメリカvsイスラーム）

●イラクがクウェートに侵攻（1990）→アメリカ中心の多国籍軍が応戦＝湾岸戦争（1991）

●アルカイダのウサマ・ビン・ラディン

2001年、アメリカ同時多発テロを行う

⇔アメリカのブッシュ大統領は、タリバンがアルカイダを支援したとしてアフガニスタンへ侵攻（2001）

⇒イラクに大量破壊兵器があるとして、イラク戦争（2003）

↓

中東地域の民族運動が活性化し、アラブの春（2011～）と呼ばれる

⇒この中でシリアで勢力を伸ばしたのが、IS（イスラム国）